

# 地域自治を見つめて20年

## ひと、知恵、情報を結ぶ市民まちづくりネットワーク

### 二十周年迎えたまち研明石

まち研明石代表幹事 松本 誠

た。この年は同時に、世界政治のうえでもベルリンの壁が市民の手で取り壊されて、ソ連邦解体や東ヨーロッパ諸国の民主化と東西冷戦構造の崩壊が始まった年でもあった。国内政治でも、参院選で社会党が地すべりのな勝利で自民党の単独過半数が崩壊し、九三年の自民党政権崩壊につながる歴史的な変化が始まった年でもあった。

まち研明石のメンバーは、このような歴史的な時代の変化を敏感に感じながら、新しい価値観と住民主体のまちづくりへの胎動を意識し、市民の立ち上がりの遅れや住民参加行政の立ち遅れを見つめ、その先駆的役割を果たそうという「志」を共有してきた。

#### 恵まれたまちづくり資源とのんびり体質

明石は大阪から四十分足らず、神戸から十分余という阪神都市圏の郊外に位置する。兵庫県で五番目の人口規模に比して、市内には都市的な性格とともにまだ田舎の風情が混じりあい、市民の八割以上が永住を希望するまちである。

東西十六キロの細長い市域は明石海峡

#### もうすぐ四百四十回

人口三十万人弱、日本標準時子午線が通る明石市で「まち研明石」と名乗る「まちづくり市民シンクタンク」が活動をはじめから、この十一月でちょうど二十年になる。一九八九年秋に十人ほどのメンバーで始めたまちづくり研究会がその後、長期的な活動の展望を込めて「明石まちづくり

研究所」と改称し、毎月二回の定例会を重ねてその回数は四百四十回になろうとしている。

#### まち研明石発足の背景と時代状況

「まち研明石」が発足した一九八九年十一月は、バブル経済の崩壊がはじまる直前で、明石でもさまざまな乱開発が進んでい

と播磨灘に面し、戦後の経済成長期には工場進出が相次いだ。が、まち全体としては乱開発から免れてきた。コンクリート護岸で固められて自然海岸がほぼ喪失した大阪湾・播磨灘の中で唯一、約十キロにわたる半自然海岸を残し、背後地には市街化調整区域や農地、ため池、緑地、山林・雑木林などの自然環境が残る恵まれた環境がまちの魅力になっている。

もう一つの魅力は、古来から東西南北の交通の要衝だった立地条件から、万葉の時代から歌に詠まれた須磨・明石の歴史や文化史跡の数々、明石城址や城下町の歴史的遺産にも恵まれていた。加えて、気候温暖、風光明媚、災害が少なく、タイやタコなど全国屈指の明石海峡の海の幸の恩恵を受けて「魚のまち」を看板にし、日本標準時子午線がまちのシンボルになるなど、多彩なまちづくり資源を有している。

他方、こうした恵まれたまちの環境が反映して、市民と行政はのんびり、ゆったり「ぬるま湯」体質に浸っていたから、時代環境の変化への対応に立ち遅れ、まちづくり資源の破壊や衰退に的確な手を打たないまま放置してきた。まち研明石が発足した時期は、ようやくまちの一部に危機感

が表れてきた時期でもあった。

### まち研明石の発足と活動

一九八〇年代の後半、筆者は明石市域を担当する地方紙の新聞記者として、こうした環境の変化とまちの課題や変容を伝えながら、市民のまちづくりへの胎動を掘り起こしてきた。商店街活動や環境問題に取り組む若手グループ、主婦グループ、市職員の一部にも市民のまちづくりにかわる動きをするメンバーも現れ、連携を促してきた。しかし、当時はまだ、多様な問題を総合的に捉えるための情報や意見を交流する場がなかった。互いに知らないまま活動している市民同士が交わり、ネットワークを広げていく「場」があれば、新しい人材を発掘し、一人ひとりの力量をつけ、互いに知恵と役割を出し合って、住民主体のまちづくりを生み出していくエネルギーになるという思いが、まち研明石発足の動機でもあった。

まちづくり研究会の旗揚げに集まったのは、商店街の若手活動家、瀬戸内の環境問題に取り組む市民活動家、映画サークルのリーダー、市の職員や弁護士、建築家、

福祉ボランティア、ジャーナリストなど十人余。毎月二回の例会は第二、第四水曜日の夜と定例化し、今年中に四百四十回を数える。まちづくりの勉強会の場でもある例会にはリサイクル運動や健康食品運動、漁業関係者、女性グループの活動家など多彩な顔ぶれが加わり、登録会員は最盛時三十人を超すようになり、毎回十五、六人の会合が定着していった。

例会の会場は、西明石駅近くの酒屋のフリースペース。酒小売店を営むメンバーの一人が店をコンビニ風の長時間営業店に改造し、店の奥にコミュニティスペースをつくりさまざま市民活動グループに提供、二階には自ら主宰して「まちかど寄席」を開く高座もつくっていた。例会は毎回、食事をしながら深夜日付が変わるころまで議論が続いた。時間の気兼ねなく腰を据えて議論できる会合の場を持てたことが、二十年間欠かさず活動を続けられた大きな要因の一つでもあった。

まち研の活動は、当初から「市民による、市民のためのまちづくりシンクタンク」をめざした。明石のまちはいま、どのような問題を抱えているのか。どのようなまちづくりをめざさねばならないのか。どこで、

どんな人やグループが、どのような活動や運動に取り組んでいるのか。行政はどのようなまちづくり計画を進めようとしているのか。

こうしたさまざまな情報を交流、分析し、課題と問題点を明らかにし、まちづくりの方向性を探る。そうした活動から生まれてきたまちづくり情報を市民に提供し、できれば市民や行政に提言していくことを目標とした。

そのために当初は、明石の実情と問題点を総合的に知ることに重点を置き、地域を幾つかのブロックに分けて、それぞれの地域の特徴や問題点、市の総合計画等に盛り込まれている計画や構想、地域で活動している人々やグループに関する情報を学び、共有していった。こうした初歩的な「地域分析」学習は、地域ごとの特徴や課題を知るとともに、産業や環境、福祉、商業、都市計画、交通、水、教育などの分野別テーマについての議論を交差させながら、全域の状況をメンバーが共有することになり、その後の議論に大きく貢献した。また、市民の持つ総合的な視野と、行政の縦割りのな視野との違いを確認することにもなり、市民的感觉を磨いていく訓練ともなっ

た。

勉強会は月二回の例会だけでは消化しきれず、初年度から毎年夏か秋に明石近郊の施設で一泊二日の合宿討議を恒例化し、ゲストをまじえた二十人前後の夜なべの議論を行い、一年間の総括や活動方針を練るのに役立った。

## 二十年間の活動の足どり

まち研明石の活動の足どりは、十周年を越えた時点で一度取りまとめたが、二十年を迎えるにあたりあらためて議論して、次の六つの区分で総括した。(注1)

### 【一九八九〜九四年】草創期(学習、提言、重要課題への対応)

明石のまちの学習や分析をしながら視野を広げ、まちの全体像を把握することに重点を置きながら、研究成果のまとめや出版への模索をするが、大蔵海岸の埋め立て計画が動き出すなどさまざまな具体的な課題への対応に追われ、出版は先延ばしになったままである。この間、二回にわたって「まちづくり緊急提言」を発表し、大蔵海岸埋め立ての中止と整備のあり方や明

石港の再開発、市役所の大久保駅前再開発地への移転などを提言した。

ネットワークの広がりやまちおこしイベントのネットワーク化を模索したり、まちづくり情報紙の発行も続けた。まちづくりは空理空論ではなく、いま生起している問題に対応する中で具体的な展望や市民の意識変革が生まれることを実感した時期でもある。

### 【一九九五〜九八年】まちづくり実践講座と議会や行政改革への視点づくり

五年間の蓄積を市民に還元し、新たな人材の発掘と「まちづくり人」のエンパワーメントをめざそうと「まちづくり実践講座」をスタートする二日前、阪神・淡路大震災が起きて、講座の開始を一年間延期したのは大きな試練だった。震災復興とまちづくりを考える中で、明石海峡大橋の完成をにらんだ埋め立て事業が強行された。まちづくり実践講座は翌年から四年間にわたり継続して取り組むが、まちづくり課題の前進や解決には行政改革や議会改革が重要であるとの認識が強まり、議会への市議送り込みや市長選へのかかわり等がはじまる。

【一九九九～二〇〇一年】市民派議員の増強や市政の末期症状、花火大会事件の発生

震災直後の九五年市議選で明石では初めての市民派議員が誕生した後、市政の末期的症状が強まる中で議員を増やしていく必要性を痛感。九九年にはまち研内部からも立候補し市民派議員が三人になった。立ち遅れている市民活動支援センターなどの拠点づくりと中心市街地の活性化を結びつけたワークショップなどを重ねていたところへ、大蔵海岸埋立地での花火大会事件が起こる。半年後の砂浜陥没事故と合わせて十二名の犠牲者をだしたことで、市政刷新と改革が急務になった。大蔵海岸花火事件を考える市民の会を立ち上げての原因追求と責任追及の活動は、安全・安心の市政へ転換させるインパクトを与えた。

【二〇〇二～〇三年】市長選挙への対応とまち研のあり方についての再生論議

花火大会事件での岡田市長の責任と辞任を求める声が高まる中で、市長選挙への対応が議論の焦点になる。まち研は一貫して、個別課題での直接行動は取らないとい

う申し合わせにもとづいて、メンバーの多くは「市民の市長をつくる会」の動きに合流して二〇〇三年四月の市長選の「当事者」となる。まち研の代表幹事が擁立されたが、惜敗。一年間は選挙後のまち研再生議論に迫られる。

【二〇〇四年～〇六年】新たな出発の模索と新しいメンバー補強による再出発

市長選後の総括をめぐってまち研の今後について議論を重ねたが、メンバー全員の意見を集約する中で、従来のまち研の基本方針の上に立って再出発した。新しいメンバーも相次ぐ。二〇〇〇年に入って以降、明石の市民活動のすそ野が広がり、もはやまち研が市内の市民活動をネットできる状態でなくなった。まちづくり学習などそれぞれに専門的なNPOが登場する中で、まち研は政策研究などを重視していく。

【二〇〇七年以降】市議四人の常時参加と政策研究、地方分権と地域自治の土壌づくりへ

二〇〇七年春の市議選以降、四人の市議がレギュラーメンバーとして常時参加し、政策研究の議論に拍車がかかる。市民・議

員フォーラムの開催や、自治基本条例の検討委員会と並行して住民自治研究会を立ち上げるなど「市民自治元年」を二〇〇八年に意識的に宣して、住民自治のあり方を問い直す議論を重ねている。

まちづくり市民シンクタンクに

六つの機能

こうしたまち研の活動には、まちづくり市民シンクタンクとして六つの個別機能がみられる。

困ったときの「駆け込み寺」

第一は、地域政策や開発に伴うさまざまな問題が持ち込まれる「駆け込み寺」の機能。緑豊かな市街化調整区域の雑木林を開発する動き。大蔵海岸を埋め立ててレジャーゾーンをつくる計画。駅前の再開発計画に伴う問題。工場跡地の再開発。港の砂利揚げ場移転。商店街のど真ん中にパチンコ店や競輪の場外車券売場をつくる計画。住宅街を分断する高架道路計画…。まち研二十年の前半はこうした乱開発やバブルな公共事業などに伴い、地域の環境を脅かす

問題が、次から次へと持ち込まれてくる。例会では、メンバーが多様な立場からどのように対応していけばいいかを議論し、問題解決への視点や対応策について可能な限りの問題提起に努める。まち研としては個々の問題に直接対応しないが、メンバーの何人かはそれぞれのかかわり度合いに応じて当事者の活動を担ったり、新たな研究・活動集団を立ち上げて当該住民の運動を支援していく。

地域政策とくに行政施策の批判的な活動に関与していくと、行政からは疎んじられがちになる。まち研自体は直接関与しなくても、メンバーの何人かが関わりを持っていると、「まち研が後ろにいる」と見られがちだ。最近では住民参加が深化し、計画段階からの住民参画が当然のようになってくると、行政施策への批判や反対は「もう一つの政策提言」と受け止められるべきだという議論が出てきているが、当時はまだ「行政に楯突く反対勢力」という見方が根強く、まち研と行政は「不幸な関係」にあった。住民主体のまちづくりを進めるには、住民が「もう一つの政策提言」をしていくために、住民の活動を支援するシンクタンクが存在しなければ、絵に描いた餅

になりかねない。

### まちづくりの事業化支援

二つ目は、地域づくりやまちづくりイベント立ち上がりの支援。イベントを継続的な地域づくり、まちづくりに発展させていくためには、目的や位置づけを明確にし、住民や行政に働きかけていく仕掛けや戦略が重要である。「明石原人」への関心を早くから抱いていた発足当初からのメンバーである山根金造さんは、原人へのロマンをまちづくりに生かせないかとまち研に夢を持ち込み、メンバーの知恵を借りて九一年に第一回明石原人祭りを開催してしまった。まつりはその後、人口七万余の大久保地区の各種団体や市民グループ、企業が参画し、明石を代表する手づくりのまちづくりイベントとして継続している。

原人祭りに触発されて明石駅前を中心市街地の商店街ではじまった「明石海峡ノミの市」は、商店街のアーケードを利用しての大規模なフリーマーケット。「リサイクル、利再来る」を呼びかけて、商店街をコミュニティの核にする活性化をめざすとともに、環境や福祉、消費生活、文化活動などに取り組んでいる人たちも参加

した。映画サークルが商店街の中の映画館を利用して無声映画会を開くのにと役買い、福祉ボランティアグループなどの参加で高齢者や障害者を招待する。担い手は商店街やさまざまなグループだったが、企画や段取りは、まち研の議論の中から生まれた。

### 既存のまちづくり主体のエンパワーメント支援

商店街の活性化やまちづくりの拠点づくり、自治会改革や先駆的な活動に知恵や人的ネットワークを役立てるのも大事な三つ目の機能だった。

明石の商店街の若手事業者の連携は、まち研発足に先立ち一九八九年初めから二年間の勉強会を経て、九一年に「町衆明石」（明石青年事業者協議会）が発足した。しかし、団体加入の連携組織は活動が硬直しがちなことから、翌年には個人参加の「明石なりわい塾」を生み出した。事業者と一般の市民、行政マンらが一緒に商店街のあり方を毎月集まって話し合う。魚の棚商店街の一角にある空き家を利用して、飲み食いしながらの議論に沸いた。まち研メンバーの多くも顔を出した。まち研の商店

街版ともいえる位置づけだが、このように個別テーマにはそれに対応した場をつくることによつて、まち研の例会テーマが偏らず、多様な話題を議論できることにつながった。

地縁団体の代表格である自治会・町内会は明石にも四百五十団体ほどあるが、地域での組織率は高いものの住民主体のまちづくりを担う自律的、能動的な活動を行っているところは少ない。大半は行政の下請け的な位置にあり、受け身で消極的な活動にとどまっているが、地域における代表機能を持つ自治会などの地縁組織抜きには、地域課題を解決する住民主体のまちづくりは難しい。

まち研も幾つかの自治会活動の要請を受けて具体的な問題への知恵と協力を求められた。九〇年代には海岸埋め立て問題やマンション開発にかかわる問題、道路計画や砂利揚げ場の移転にかかわる問題などが持ち込まれ、地縁組織を超えた活動の展開について議論した。まち研メンバーも歳を経るにつれて、それぞれの地域社会で自治会や商店街の親組合、PTAの役員などを担う立場になり、自治会改革の現場に足を踏み入れる必要に迫られた。

### 新しいまちづくり主体の創出

目の前に横たわる問題が見えていても、市民の一人ひとりがばらばらのままであれば、問題解決の力を持ち得ない。課題があれば、それに対応する市民グループや活動の場を幾重にもつくっていくのが「まち研流儀」だった。まち研が直接かかわったわけではないが、まだ担い手の見えない新しいまちづくりの主体を生み出していくのも四つ目の機能だった。

明石の福祉分野では長年重要な役割を果たした「安心して老いるために91・Xの会」は、まち研メンバーの多くもかかわって羽田澄子監督の映画の自主上映に成功したのを機会に、継続的な活動を続けた福祉分野のグループ。会の活動計画や議論はまち研の場でも逐一報告されて、協力や提案をしていく連携が自然とつくられた。障害者問題にかかわるメンバーは作業所ネットワークづくりに奔走し、福祉のまちづくり活動の外延部を支える。六年前に立ち上がった「まちづくり市民塾」は、不特定多数の市民を対象にした連続講座等を年間通じて開催し、恒常的な学習の場を市民に提供している。これにも、多くのまち研

メンバーがかかわる。

### まちづくり情報の共有へ情報媒体を創設

まち研は発足以来、文化・芸術の情報誌の立ち上げや市民活動のインフォメーション窓口の開設、連携組織の発足などを働きかけていたが、具体的な成果につながらなかった。そんな中で、九二年にまちづくり情報紙として「明石ごえん通信」を創刊し約五年間にわたって毎月約六千部の手づくり情報紙を発行した。まち研メンバー以外も参加して「明石ごえん通信舎」を立ち上げ、ワープロ編集と簡易印刷によるB4判裏表の「黄色い紙の情報紙」には、一般紙や広報紙には載っていないクオリティーの高いまちづくりニュースや解説、辛口のコラム、まちづくりグループの紹介など硬派の記事と「読んで得する明石情報」の特集で、ファンがついた。

### 市民派議員の輩出と、市民と議員の合同政策研究の場

六つ目の機能は、議会改革へ向けた市民派議員の輩出と政策研究の場になっていることである。住民主体のまちづくりを進めていこうとすると、行政の壁や議会の壁

に否応でもぶち当たる。行政と議会の改革は避けて通れない課題でもある。地方自治が「住民自治」を本旨としている限り当たり前のことであるが、これまでは概して政治と一線を引く市民活動が多かった。しかし、住民自治や具体的な政策に肉薄すればするほど、政治や行政の改革が不可欠になってくる。

メンバーの一人です市の職員組合の委員長だった永井俊作さんが九五年市議選で上位当選したあと、精力的に取り組んだ議会改革の壁が例会での議論になった。現職議員が例会の正規メンバーに加わる中で、議会改革や行政の問題点がより具体的にいったほか、議員にとっても貴重な政策研究の場になった。四年後の選挙では、市民派議員を応援する「市民まちづくり21C」という組織を立ち上げて、さらに二人の市民派議員が上位当選した。その後二〇〇七年の選挙後はまち研の正規メンバーの議員が四人に増えて、例会は市民と議員の合同政策研究の場にもなっている。

こうした議員と近隣市町の友好的な議員らが中心になって二〇〇〇年、明石を拠点に「兵庫議員ネット」が発足し、県内の五十人を超す市民派議員らが明石で毎月

例会を開き、政策勉強会を重ねている。まち研のように、議員集団が市民主導の市民活動の中で政策勉強会を継続的に重ね、その輪が全国的に広がっている例はおそらく全国でも例を見ないはずである。その成果がじんわりと表面化してくるのは、これからであろう。

#### まち研が果たすべき総合的な役割

まち研は現在も法人資格を持たず、任意の市民活動団体の形態を取っているが、団体の性格と活動方針は明確である。

「明石のまちづくりを総合的に研究し、情報の交換と分析、提言活動を行う自主的な研究・交流グループで、研究・交流活動を通じてまちづくり運動の人的ネットワークを広げることと目的とする。メンバーはまちづくり活動に幅広い視野から関心を持ち、さまざまな分野で活動している明石市民および周辺地域に居住する有志で構成する」

また、地域の現状と課題をさまざまな観点から論議した結果、「まちづくりを考える視点」を次の五つに集約してきた。

① そのまちの性格とありようを明確にする

② 環境や循環型社会を基本に、総合的に考え、総合的に実行する

③ 地域自立、地域自治、協同をめざす

④ 「住民参加」型から、住民主導・行政支援のまちづくりをめざす

⑤ 人材を育て、人材を育てる場をつくる

いま、地方分権型社会が進展する中で、基礎自治体における住民自治の確立が急務になっている。そのためにも、地域社会の中で住民の主体的な活動をどう保障していくかが問われる。まち研活動の個々の機能とは別に、自治的な地域社会の形成に寄与していく総合的なまちづくりシンクタンク機能が求められている。

その点からいえば、まち研がめざしてきた次の三つの総合的な機能の生かし方が、新たな課題になる。

① 市民の発想と目線に立った、全市的な総合的まちづくり計画を立案・提言していくまちづくり市民シンクタンクの役割を果たす

② 地下水脈がつながっているように、柔らかな人的ネットワークを形成する機能

③ まちに潜在している人材を発掘し、市

民力をつける機会を提供していく人  
材育成機能

迎える転機、市民活動の広がり  
と行政との協働の芽生え

今回の政権交代によって、この国の仕組みは官主導から市民主導へ大きく転換する期待を膨らませている。足元の明石市でも自治基本条例の制定によって、市民主体の行政へ大きな転換を図ろうとしている。そのような環境下で、まち研は大きな転機を迎えている。

一つは、市民活動のすそ野が広がり、もはやまち研発足当初に担ったような、まちづくり市民活動のネットワークを担う役割は終わろうとしている。というよりも、ひとつの任意な団体の活動ではその役割を担い切れないほど、市民活動の量と質は大きくなった。その中で、まちづくり市民シンクタンクの性格を限定的に絞っていく時期にきている。

もう一つは、行政との関係が、ここ数年で大きく変わってきたことである。先に述べたように、まち研はかつては地元の自治体から「敵視」され、まちづくり不可欠

な市民と行政とが「協働」していく糸口すらつかめなかった状態にあった。二〇〇三年の市長選挙を経てここ数年ようやく、地元行政との連携・協働の道筋が開かれ、まち研はじめまち研のメンバーがかかわるさまざまな市民活動の現場で、連携と協働が芽を吹いてきたことである。

かつて、先進的な他市のまちづくり担当者から「まち研明石のような市民のパートナーがいれば、市民主体のまちづくりにもっと成果を上げられるのだが…」といわれたことがある。市民主体のまちづくりは、先駆的な、市民力豊かな市民グループが存在してはじめて成り立つ。まち研明石の二十年間を振り返って、まち研がめざした市民主体のまちづくりが明石でもようやく緒につく見通しが生まれてきたと見るのが、まち研メンバーで一致した見解である。  
(まつもと・まこと)

※注1 「人、知恵、情報を結ぶまちづくりシンクタンク―まち研明石の果たす機能と展望」二〇〇一年八月、21世紀ひょうご Vol.185. 「市民が変える明石のまち」二〇〇三年三月刊（文理閣）所収

連絡先

明石まちづくり研究所（まち研明石）

〒673-0845

兵庫県明石市太寺4-9-17

電話 075(913)1241

E-mail machiken@jichi-akashi.com

http://jichi-akashi.com/machiken.html

市民主体のまちづくりは新時代を切り拓く  
くかまち研明石20周年のつどい

二〇〇九年十一月二十九日

午後一時三〇分～八時

グリーンヒルホテル明石

第一部では「市民主体のまちづくりと行政の役割」と題して、井戸敏三兵庫県知事や地元の北口寛人明石市長、中川暢三加西市長、清水ひろ子播磨町長、古谷博稲美町長の五人の首長を招き、まち研明石代表幹事の松本誠のコーディネートでシンポジウムを行う。

第二部では、まち研の活動にかかわったメンバーやゲスト参加した人たちははじめ、市民主体のまちづくりに関わる多方面の参加者が集い、交流懇親会を開く。第二部の参加費五千元。参加申し込みは右記のまち研明石へ。